

『美しい輪廻』

黒木 鞆

5,315 文字

あらすじ:

ぼくはハウスクリーニングのプロフェッショナルである。日常も仕事もひとつひとつの所作や決め事が完全にルーティン化されており、完璧である。しかし、女のひと(お客さま)と出会い、「わたしの心もきれいにしてくれませんか」と言われてから、ぼくの鉄壁のルーティンはもろくも壊れていくのだった。

ぼくは10年前、僧侶になると言って出家して、修行の途中で挫折したことがある。

そのことが関係しているのか、28歳になった今でもぼくの髪の毛は丸刈りである。髪の毛が短いということは合理的である。手入れが簡単で、なんと言っても抜け毛が目立たない。潔癖症のぼくにとって、髪の毛の長さは、最終的にハウスクリーニングというの仕事を選ぶことになった理由のひとつでもある。

ハウスクリーニングの仕事は、時間に正確でないといけない。服装は清潔でないといけない。しみひとつないチノパンとポロシャツを着て、玄関の前で、デジタルの腕時計を見て、9時59分から10時になった瞬間にインターホンを押す。ドアが開くと、深々とお辞儀をして、清掃道具の入ったキャリーバッグから新しい靴下を取り出して履き替える。そして、今まで履いていた靴下をビニール袋に入れ、キャリーバッグにしまい、また深々とお辞儀をする。そうやってハウスクリーニングの仕事が始まるのだ。

ぼくはどう考えても面白い人間ではない。鉄仮面のように不愛想である。そもそも、どういう時に笑顔になったり笑ったりするのかさえも分からない。そんな人間でも、仕事においては、信頼を得ているリピーターのお客さまを多く抱えている。窓拭きや床拭きやトイレ拭きの所作が決まっていて、ロボットのように正確で完璧である。ほこりひとつも残さない。浴室のしつこいかび取りではまるで自衛隊の防衛マスクのような完全な装備でのぞむ。キッチンなどの水回りはもちろん水垢ひとつ残さない。食器棚に並んでいる食器やコップが少しでもばらついていれば、きれいに並べ直していく。お客さまの飼っている犬の匂いがきつく感じれば、犬を庭に連れていって、ホースで水を流しながら、シャンプーできれいに洗ってしまう。お客さまに依頼されてないことまで、無意識についついやり過ぎてしまう。清掃をすることは呼吸することと同じくらいの当たり前の事であり、仕事として誇りに思っている。面白くなくても、笑顔になれなくても、ぼくの仕事のやり方はお客さまに伝わると思っている。そして、仕事が終

われは、またお客さまに深々とお辞儀をする。外国の人が見たら、どうしてそんなにお辞儀をするんだと笑われるかもしれない。それでも、ぼくは礼儀・礼節という型を重んじたいと思っている。お客さまの満足げな顔が見られればそれでいい。お客さまが喜んでくれればそれでいい。ぼくにとっての判断基準は全てお客さまにある。世界から「お客さま」が消えてしまったら、ぼくは何をどうしたらいいのか、何を目的に生きていけばいいのか分からなくなってしまうんだと思う。

畳部屋の1Kの飾り気のない木造アパートに帰るとぼくはいつも通りに料理を作る。リズムカルに野菜を切っている所作は仕事と同じように無駄がない。畳の上にある小さなテーブルにぼくが作った料理を並べて、両手を合わせて、食べ始める。食べ終わった後も、両手を合わせて、片付けを始める。まるで僧侶のように、精進料理に似た食事をし、テレビもない中、食べる音、食器の音、食器を洗う音しか聞こえてこない。淡々とやるべきことをやっていく。食事が終わると、キャリーバッグから清掃道具を取り出して、汚れたタオルは洗濯機に入れ、洗剤スプレーの容器に計量カップで洗剤の原液を入れて、調合していく。スクイジー(清掃道具)をきれいに丹念にみがき上げる。清掃道具の整備や準備が終わると、布団を敷いて寝床に入る。部屋にはきれいに洗濯されたタオルが干してあり、ぴがぴかに光っているスクイジーは壁にかけてあり、洗剤スプレーもきれいに並んでいる。ぼくはきれいになった清掃道具に囲まれながら、安心して深い眠りへと誘われていく。こうやってぼくの1日が終わっていくのである。

7月の半ばだったと思う。梅雨が長くて、浴室のかびが繁殖して仕事が途切れることなく忙しい日々を送っていた。ぼくはいつもの通りのチノパンにポロシャツといった服で、清掃道具の入ったキャリーバッグを引きずりながら、ある高級マンションに住んでいるお客さまのもとへと向かっていた。インターホンを押してドアが開くと、髪の毛が

腰ぐらいまである端正な顔立ちをした 20 代後半位の女のひとが立っていた。初めてのお客さまである。ぼくは深々とお辞儀をする。ぼくはふと、長い髪についている綿ぼこりに気付いて、女のひとに近づいて無意識に綿ぼこりを取った。女のひとは思いがけないぼくの行動に「え？」と動揺している。きれいなひとだが、どこか過敏なところがあった。そんな微妙な雰囲気の中、ぼくは仕切り直するため、よろしく願います、と言って、また深々とお辞儀をする。

いつも通りに、清掃を始めようと、キッチンや浴室や部屋を見まわると全ての箇所がかなり汚れていた。この汚れは普通ではない。女のひとはしばらく、掃除や片付けが出来ない精神状態だったのかもしれない。ぼくはよけいなことを聞くことなく、プロとして、汚れている場所を、ひとつひとつ丁寧に、そして徹底的にきれいにしていった。散らがっている雑誌や本も片付けていく。女のひとは、パットやブラシや何種類もの洗剤を使って、きれいにしていく様子をじっと見ていた。薄気味悪いくらいぼくの所作をずっと見ていた。

女のひとの表情はぼくと同じように一切の笑顔がなかった。

汚かった部屋の隅々まで、見違えるようにきれいになって、片付けを終え、深々とお辞儀をして帰ろうとすると、ダイニングテーブルに豪華なお寿司が用意されていた。女のひとは食べて下さいと促すがぼくは丁重に断った。しかし、何度も誘ってくる慙然とした女のひとの表情が気になり、最終的にぼくは断りきれなくなった。女のひとの顔を見ていると同じ穴のむじなのようにも思えた。

ぼくは洗面台で手を入念に洗い、テーブルに座ってお寿司を一口に頬張った。女のひとはぼくの食べる姿をじっと見ている。二つ、三つとお寿司を口に頬張るも、女のひとはぼくの顔をじっと見たまま。

「何か？」と聞くと、

女のひとは、ぼくの目を離さず、じっと見たまま、

「わたしの心もきれいにしてくれませんか？」とぽつりと口を開く。

生気のない小さな声だった。

このひとはなにを言っているんだろう？ぼくは言っていることが理解出来ないながらも、意に反して、心臓は高鳴っていた。

「こころをきれいに、ですか？」

ぼくはそう聞くことしか出来なかった。

女のひとは少し泣いた。ぼくはもちろんなぐさめることもできず、どうすることもできなかった。女の人はずばく泣いてから、顔を上げて、僕をまたじっと見つめていた。戸惑いおろおろするぼくは、どうしていいか分からなかったが、なぜか心地が悪いという訳ではなかった。

女のひとがぼくをじっと見ている表情は寂しげで、そこはかたく美しかった。その表情を見ている間、時間が止まったように感じた。

ぼくはその不思議な体験をした日以降、女のひとの言葉が脳裏にやきついていて、ぼくの頭の中をぐるぐるまわり始めていた。アパートに帰って料理をするも、いつものリズムカルさがなくなっていた。仕事でもいつものように清掃をしていると、ありえないようなミスをしてしまい、お客さまに怒鳴られてしまった。今までこんなことは1度もなかった。プロである以上、クレームももちろんのこと怒鳴られるなんてことは、今までのぼくにはありえないことだった。ぼくはお客さまの怒りがおさまるまで何度も何度もお辞儀をして謝るしかなかった。

あの女のひとに会ってから、ぼくの日々のルーティンが大きく崩れていった。次第にぼくは料理をする気にならず、カップラーメンを食するようになった。そして、布団に入ってもなかなか眠れない。「こころをきれいにする？」その意味を無意識に悩んでしまう。ぼくは10年前、出家しようとして、修行を途中で逃げ出した時のことを思い出した。あの時も心の中がぐしゃぐしゃだった。夜道を一人歩き出し、公園のジャングルジムに乗って、夜空を眺めながら、生産性のない解決方法を朝日が昇るまで考え続けていた。

ぼくはフロイトの精神分析の本を乱読してみた。夢判断や精神分析入門を時間をかけて読んでみたが、難し過ぎて、単細胞のぼくの頭では、解決の糸口さえ見いだせなかった。

ぼくはお寺の広い部屋で一人座禅を試してみた。座禅を長時間することによって心の中が無に近い状態になった瞬間もあったが、またすぐに雑念がぼくの頭の中を占めるようになり、問題を解決するには至らなかった。

ぼくは白装束を着て、滝に打たれてみた。頭の中ではどうせ解決にならないと思っていたが、やってみると、意外な効果が生まれてきた。凍り付くような冷たい水は、ぼくの身体を極限まで麻痺させることによって、滝から上がった後、なにか解決方法が見えそうな気分になっていた。

ぼくはもっと身体を極限状態にもっていくために、ある山奥で、2日間寝ることも食することもせず、山伏の格好をして、山道を登ったり駆け下りたりという荒行に挑戦してみた。しかし、2日目の朝、ぼくは、くたくたになって棒のようになった足を滑らせ、急斜面を想像以上のスピードで落ちていった。ぼくは落ちていきながら、もしかして、死ぬかもしれないと思った。

九死に一生を得たぼくは、アパートで傷だらけになって、布団の中で、じーっと天井を見ながら物思いに耽っていた。いろいろな回想や思いが出てきては消え、消えたと思ったらまた出てくる。例えば、駅の風景。電車と電車が交差する瞬間に運転手が敬礼する。サラリーマン二人が改札を出て別れる時、一人のサラリーマンがもう一人のサラリーマンにお辞儀する。車庫に入った、誰もいない、しんとした電車の中。ぼくは吊革一つ一つ、洗剤を使用して、きれいにしていく。例えば、お寺の風景。お参りする人。手を合わせて、お

辞儀する。修行僧がお寺の中トイレの便器をまるで仏像を磨いているかのように丁寧にゆっくりと気持ちを込めて掃除をしている。18歳の時、出家して修行していたぼく。修行に疲れ、ぼーっとしてお寺の廊下の床を雑巾で拭き上げている。バケツに足をかけてしまい、バケツの水が廊下に流れていく。その時、そこにいた佇まいがきれいな巫女さんが、ずっとぼくの横に来て一緒になって水を拭いてくれる。その後も、巫女さんは何も言わず、笑顔でぼくの掃除を手伝ってくれる……

天井をぼーっと見ながら、我に返った。「あ……」と声がこぼれた。ぼくは答えのようなものを感じた。清掃(きれいにする)＝礼儀・礼節＝信仰心と次々とフラッシュバッグのように繋がっていく。

まわっている。ぼくも女のひと、みんなも、すべての中心にある「こころ」はぐるぐるまわっている。寄り道したり、抵抗したり、逃げたりもして、いつの間にやら、どこかに漂流するのだ。

数か月後。女のひとはある「仕事」に漂流した。ぼくは女のひとの「こころのひだ」に漂流した。

あるマンションで、女のひとは、チノパンとポロシャツを着て、ぼくと一緒に、清掃をしていた。

女のひとは長い髪をきれいに束ね、無心になって清掃をする。トイレの便器、キッチンのシンク、換気扇の羽、とぼくが指示した箇所を一生懸命に清掃していく。

女のひとの清掃しているその姿はどこか瑞々しく清らかだった。

女のひととぼくはスクイジーを持って、ガラス清掃をする。スクイジーの使い方がなかなか上手いかない女のひとにぼくは丁寧に教える。スクイジーをよこ、よこ、よこ、ときって、最後に、たて、できる。ガラスが一通りきれいになると、ぼくは洗剤の拭きむらがないか、汚

れが残ってないかチェックしていく。女のひとも、ぼくのまねをしてチェックしていく。

女のひとはフローリングの床をウエスできれいに拭き上げていく。床がきれいになると、ぼくはワックスを塗布していく。フローリングの床は、見る見るうちに光沢が出てくる。窓の外から入ってくる光に塗ったワックスが反射する。そして、その反射した光は四方八方、部屋中を照らしていた。

反射した光は女のひとの顔を照らす。女のひとは眩しい表情をする。

反射した光はぼくの顔を照らす。ぼくは眩しい表情をする。

女のひとはぼくの表情を見ながら、少し微笑んだ。ぼくもそんな女のひとを見て、少しだけ微笑んだ。

こうやって、ぼくと女のひとは一緒にハウスクリーニングの仕事をするようになった。

女のひとは清掃をするようになって、変わった。

ぼくも女のひとと一緒に清掃をするようになって、変わった。

ぼくの心は少しだけ広がった。ぼくは喋ることが苦にならなくなり、女のひとと一緒にいると、自然に笑顔になった。

ぼくと同じように女のひとがつかれて笑う姿をふと目にすると、ぼくはなんともいえないような喜びのようなものを感じた。

ぼくは女のひとと仕事をしている最中、ふとあることに気付いた。10年前、出家していた時に手伝ってくれた巫女さんと、女のひとの顔の表情がなんとなく似ているのだ。ぼくはそのことを女のひとに話すと、少しだけ微笑んで、質問に答えることなく、きれいにきれいに床を磨き続けていた。